

# 赦せない人を赦す

別居した夫の最期を見取った 田辺 政子さん

(愛知県蒲郡市 蒲郡バプテスト教会)

政子さんは、蒲郡市三谷（みや）町の職場で出会った田辺勝（まさる）さんと1959年に結婚。農家で、十人という大家族の一員となつた。まもなく勝さんは、両親の反対を押して鶴小屋を少し改築し、織物工場を始めた。織物の景気が良い頃だった。



右から 三女の美千代さん、田辺政子さん、美千代さんの夫の依田忠克さん  
後ろに立つのが、蒲郡バプテスト教会の浅田朗牧師夫妻

## 心の休まらない家庭

政子さん夫妻が同居し生活環境が変化したこともあるってか、家の中がだんだんギクシヤクして来た。両親はけんかをくり返すようになり、激しくののしり合い、舅は姑に対しても暴力をふるうようになつた。

舅は外に女性をつくつて子どもまで生ませ、姑がその子の面倒をみることまであった。よほどの苦しさを我慢していたのだろう。姑たちも大きくなつて來たので、意



か帰つて來ている。夫は、すでに

織物工場はたたみ、会社勤めをしていましたから、両親の家を出てさそくればよかつたのですが、夫は取り合つてくれませんでした。本音を言えれば、『こんな夫は、交通事故が何かで、早く死んでくれれば』とさえ思いました』

夫は、自分の親や妹にはお小遣いをあげるのに、妻には給料さえくれない、ボーナスをもらつても全然渡さない。そんな中で政子さんが生き延びただけでも奇跡だ。今考えれば、政子さんはうつになつていたとしても不思議はない。

娘が教会へ

そのような折、中学生の長女美恵子さんが近所の婦人から、「蒲郡の教会で宣教師の先生が、英語をタダで教えてくれる」と聞いてきた。英語の好きな美恵子さんは、次の日曜日から出かけて行き、その後に次女の奈保美さんと三女の美千代さんもついて行つた。楽しくて、帰つて来るので、政子さんも教会を訪れた。それが、一家の人生が大きく変わるきっかけと

なつた。

「主は：私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げて下さった。そして私の足を巖の上に置き、私の歩みを確かにされた」（詩篇40章1～2節）

政子さんは初めから、「自分が求めていたものは、これなんだな」と思った。聖書を読むと他では得られない平安をいただくからだ。三女の美千代さんは言う。

「父に對しては、長いこと『この人のせいで、私の人生はこうなつた』という気持ちでした。お父さんから何々してもらったという友達の家のような思い出が、私はないのです。姉について教会に行くようになり、小学校4年生の時にイエス様を信じました。父から受けられなかつた愛を、神さまからいただきました。

母からは、『私たちは神さまから離れたら、生きていけないよ。貧しくても、食べるもの、着るもの、住む所がなくて困つたことがないのは、誰がそうして下さつたと思つてはいるの？神さままでしょ』



発病直後（下段中央が、勝さん）

と言われていましたが、本当にそ

うだなと思います』

政子さんは、夜もおちおち寝てられないような異常な家からは出たほうがいいと本気で思い、娘たちも大きくなつて來たので、意

を決してアパートを借り、三人を

連れて出た。まず政子さんが働き、次女、長女と働き始めた。美千代さんは、まだ中一だった。それから、母娘の本当の幸せな日々だつた。

は、政子さんにまであらぬ疑いを抱いて、真夜中も大吉を出すので、家族は心が休まることがなかつた。人と嫁である政子さんが関係があるという根も葉もない妄想を抱いて、夜中の一時でも二時でも政子さんを責めた。

かたや、家庭を守るべき夫は、仕事をせずに、ギャンブルにふけることが十年以上になり、借金がふくらんで倒産状態になつた。持つていた田畠も人手に渡つた。家族は、互いに怒りをぶつけ合つていた。

「地獄絵図の中に入っているよう

でした。日本中どころか、世界中捜しても私どものような家族はなかつたのではないか、と思うくらいです。私は夫に、『こんな家から出て別の所で生活をしよう』と持ちかけましたが、夫にその気はありませんでした。むしろ、夜になるといなくなり、朝になるとどこから